

（論文）

近年のオランダ児童文学に見る LGBT に対する意識 — 児童図書「モルモット一匹とママが二人」を中心に

西川（ヴァンエーステル） 雅子

Samenvatting

In dit artikel wordt gemeld hoe LGBT-personen recent beschreven worden in Europa in de Nederlandstalige jeugdliteratuur. Als illustratie hiervan wordt één van deze werken voorgesteld: “Een cavia en twee moeders” door Pieter Feller. Dit artikel toont enkele representatieve passages van het verhaal in Japanse vertaling door Nishikawa-Van Eester. Samen met het boek werd een Japanse samenvatting ervan getoond tijdens de Pride House Tokyo tentoonstelling over LGBT van 20 september tot 4 november 2019.

要約

本稿では近年の欧州オランダ語圏の児童文学事情を鑑みながら、その中での LGBTⁱ の人々ⁱⁱ の描かれ方について報告するとともに、その現況に対する理解を深めるため実際の作品を一点取り上げ、作中の幾つかの印象的な場面を取り出し、その日本語訳を試みる。作品は、「モルモット一匹とママが二人（筆者試訳）Pieter Feller 著」である。なお、筆者による日本語のあらすじは、2019年9月20日から11月4日まで、プライドハウス東京ⁱⁱⁱにて、LGBTを題材とした絵本・児童書が展示された際、原書と共に掲示された。

Abstract

This article reports how LGBT people have been described lately in Europe in Dutch-speaking juvenile literature. In order to discuss the issue for better understanding of this current situation, one of the actual works is presented: “Een cavia en twee moeders” (One Guinea Pig and Two Mothers) by Pieter Feller. In this article, we read several impressive scenes in the story in Japanese translation by Nishikawa-Van Eester. The Japanese summary was exhibited together with the original book at the Pride House Tokyo exhibition on “LGBT” from September 20 to November 4, 2019.

I. はじめに

1983年から1986年まで、筆者はベルギーのオランダ語圏フランドレン^{iv}地方最大の都市アントウェルペン^vで暮らし、現地の言語であるオランダ語を学んだ(地図参照)。オランダ語修得のため在籍した学校には世界各地からさまざまな人たちが(そのほとんどは将来的にフランダース地方で暮らすべく)学びに来ていたが、その中で当時日本人は筆者一人であった^{vi}。



地図：オランダおよびベルギーの州と主要都市^{vii} (ドナルドソン 1983・1999)

1989年に帰国後も筆者は、多くはないものの途切れることなく現在まで翻訳・通訳業を続けている。そのほとんどが、いわゆる産業翻訳^{viii}(実務翻訳・ビジネス翻訳)や、あるいはマスメディア(主としてテレビ業界)関連の映像翻訳(放送翻訳・メディア翻訳)—海外ドラマ、ニュース、ドキュメンタリー、スポーツ・エンターテインメント等の素材を扱う—あるいは企業間の交渉・プレゼンテーションや国際展示会における講演会通訳・商談通訳であり、出版翻訳^{ix}の関連分野では数件しか経験がない。

しかし、2018年から、オランダ王国大使館・ベルギー王国大使館・公益財団法人アーツフランダース・ジャパン^xの共催で、“Bijeenkomst voor Nederlands Spreekende Japanners”(オランダ語が使える日本人の会)という交流会やオランダ語修得希望者のための学習会等々が定期的に開かれるようになり^{xi}、ご案内をいただき数回出席するうちに、文芸作品にも触れる機会ができた。そのような状況下で、2019年夏、オランダ王国大使館からの依頼を受け^{xii}、未知の領域ではあったが、オランダの児童書で LGBT の人々とその周辺を描いた作品を読み、そのあらすじを日本語で作成することになった。

大使館から送られてきた原書は、Pieter Feller という児童文学作家の“Een Cavia en twee moeders”という作品であった。直訳すると、「一匹のモルモットと二人の母親」である。筆者によって提供された「日本語のあらすじ」は、東京でオランダ王国大使館が後援する、プライドハウス東京の企画で、LGBT を題材とした絵本・児童書の展示会場に原書と共に掲示することを目的として作成されたものである。

II. 欧州におけるオランダ語圏の児童文学について

欧州におけるオランダ語圏と言えば、オランダおよびベルギーのフランダース地方がそれに該当する。(http://taalunieversum.org/inhoud/nederlands-nederland-en-vlaanderen)。De Taalunie^{xiii}(オランダ語連合)^{xiv}および駐日オランダ王国大使館によれば、オランダ語話者は世界で2300万人おり、主としてオランダ、ベルギーのオランダ語圏、南米スリナムで話されている^{xv}。

欧州の歴史的観点からは、オランダとベルギーは同時に語られることが多い。百年戦争が終わる頃、欧州は近代へと突入する。スペイン王カルロス1世(1500-1558)は、1519年にブルゴーニュ、オーストリア、ネーデルランド、スペインに渡る大帝国の皇帝となり、またこれにより、例えば現在のベルギーにあたる地域について「かつての『ベルギカ』や『フランドル』の名は歴史から姿を消し、この地は現在のオランダの地と合わせて『ネーデルランド』と呼ばれるようになる」(松尾 2014)。このように両国は、神聖ローマ帝国の時代にあっては「ネーデルランデン(ネーデルランド)、低地諸州」と呼ばれる一つの地域であった^{xvi}(桜田 2017)。

このような歴史的背景があるゆえ、オランダとベルギーのフラーンデレン(フランダース・フランドル)地方ではその主たる言語を共有している。しかし、オランダは1648年に独立した新教(プロテスタント)の国であるのに対し、旧教(カトリック)国ベルギーの独立は1830年^{xvii}であった。こういった歴史的背景や政治的状況を踏まえた上で、「様々な事情から、ベルギーは第二次世界大戦後の児童書の発展において、オランダに後れをとりました。しかし、今まさに開花期を迎えています。」という解説が、現在ではなされている(野坂 2011)。

また同じ言語を使用することにより、児童はどちらの国の児童書にも等しく触れることができ、実際、「児童が何を読むか」という点では両国の区別はほぼないに等しいと思われる。オランダ語教育の普及を目的の一つとする、既出のオランダ語連合の存在もあり、オランダ政府とベルギー北部オランダ語圏政府の言語面での連帯感是非常に強いものがある。1990年代以降、オランダでも現代ベルギー児童文学作家の作品が普通に入手でき、読まれるようになった(野坂)。

さらに、元来保守的と見なされがちなカトリック教国ではあるが、現代ベルギーのオランダ語圏においては「斬新な現代性が高く評価される傾向」があると分析されており(野坂)、その視点からも、本作品はとりわけ興味深いものではないだろうか。

III. 作品について

1. 作者および作品について

作者の Pieter Feller は、オランダの児童文学作家で、1952年生まれ。4人兄弟の末子である。Hoorn(ホールン)で生まれ(北ホーランド州の港町、アムステルダムから北35Km、かつて東インド会社の拠点であった)、20年間を過ごした。両親は共働きで、少年時代は元気に外遊びをする男の子であったが、また同時に家の中では熱心に読書をした、と本人が述べている。長じて幾つかの職業を経験するが、やがて長姉のペットショップで働くようになり、後には限られた年数ながら自身のペットショップを経営した。

作家としての創作活動に入ったのは1992年のことである。Fellerは、「書き出したときには、どういう展開になっていくのか自分でもよくわかっていないのだが、始まりと終わりだけは、わかっている。」と語っている。「だから、途中でどう話が進行していくのか何が起るのか、自分でもわくわくする^{xviii}。」とも述べている。児童書以外には犯罪小説も執筆し、このジャンルでは今まで3作品を出版している。現在まで書籍として総計50冊以上を出版し、他にも多数の作品を発表している。(http://www.pieterfeller.nl/over-pieter/)

本作品“Een cavia en twee moeders”については、出版社 Xanten による紹介、オランダ語話者の読者の感想なども合わせて報告する。

作品は2013年に発表された(作者公式ウェブサイトによる)。108ページの中に16の章(エピソード)があり、初章の表題が「父の日」、最終章が「パパがいなくなったらあわせていられる “Zonder vader kun je gelukkig zijn”」である。

学校図書の紹介等を掲載している Educatie in de klas のウェブサイトには大人の読者のレビューがある(https://leesbevorderingindeklas.nl/book-review/cavia-en-twee-moeders/)。それによると、「(同性婚の母親が二人で築いてきた、父親のいない家庭の実子を主人公として描いているが)このような本は今までなかった。」ということである。児童文学にはしばしば身近な題材として家族が登場するが、その家族像は当然のことながら時代とともに変遷してきており、特に欧米の作品には従来型ステレオタイプを離れたさまざまな家族が登場する(さくま2016)^{xix}。その中でもとりわけユニークな設定の家庭内で育つ少年が主人公であり、必然的にこの物語は強いメッセージ性を帯びることになる。(ここでは社会における LGBT という新しい概念の存在。)

しかしながら、レビューの中で注目すべきは、本来強いメッセージ性を持つこの物語が、その立場から主張しているはずの価値観を作中では決して声高に叫ぶことはしていないとい

う指摘である。この点についてはさらに4の項で後述する。

2. あらすじ

まず、実際に原書とともに会場で掲示された日本語での「あらすじ」を以下に示す。限られた字数の中で、可能な限り物語の全体像が一般の来場者に伝わるように努めた。

セブは10歳の少年で、モルモットのコービュスと二人のママ、ロッセとマールチェが家族です。この二人は「ふうふ」で、セブはパパについてはまだ何も知りません。一家は大都会アムステルダムから、セブを産んでくれた方のママ、ロッセの故郷の町に引っ越してきます。この町にはロッセのママ、つまりセブのおばあちゃんもいます。セブが大好きだったおじいちゃんは亡くなってしまったけれど、おじいちゃんはセブにすばらしい物と思い出を残してくれました。新しい学校の同級生、ご近所さんたちいろいろな子どもたちや大人と知り合う中で、時にはちょっと意地悪されたり、心ないことばを投げつけられたり、学校に変な手紙が届いたりするのですが、セブは毎日明るく楽しく元気に過ごし、友だちを増やしていきます。校長先生、ママたちの友だちのニックとジャック（どちらも男の人だけど「ふうふ」）など、二人のママ以外にもセブを支えてくれる人はたくさんいます。そしてなにより、モルモットのコービュスは、いつもセブの話をじっと聴いてくれるのでした。

主人公の少年セブには母親が二人いる。この二人は同性婚であり、そのうちの一人がセブの生物学上の母親でもある。父親についての詳細はわからない。大都市アムステルダムから母親の一人の故郷の町に移り住み、家族三人穏やかに仲良く暮らしているが、周囲にはそのことがなんとなくおもしろくない様子の人たちも少しいる。例えば、隣の老夫婦の奥さんの方は、年老いた自分たちの家に成人した子どもが寄りつかず、日頃孤独を感じているようである。そして隣に越してきた家族について、なぜか不愉快に感じている。夫は隣の女同士の夫婦(!)の息子にごく自然かつ親切に接しているが、自分は時としてこの少年に意地悪を言わずにはいられない。何か、気に障るのだ。また近所の子やセブの新しい小学校の児童たちの中でも、セブについてはさまざまな見方があることがわかってくる。

毎日いろいろな出来事があり、その中には、セブは友だちだと思っていた女の子ティビーと一時疎遠になったり、学校にセブ一家のことについて誰かが書いたおかしい手紙が届いたり、セブや母親たちが非常に不愉快で憂鬱になるような出来事も起こる。その手紙の内容というのは、或る変わった家庭があり、そのうちでは子どもがきちんと育てられていない、といった、いわゆる一家に対する誹謗中傷であり、手紙を受け取った校長先生がセブの親に会うためにやって来る。校長先生は母親の一人ロッセとお茶を飲みながら話をする。もちろん彼にはその手紙の内容には何の信憑性もないことはわかっているが、セブやその両母親の置かれた状況を鑑み、家庭訪問をしないわけにはいかなかったのだ。ロッセは、この一件についてパートナーのマールチェには黙っていよう、と思う。

親友と疎遠にはなったけれど、そのことによってセブには新たに友だちができる。毎日の、静かな普通の暮らしの中に、一家は楽しさを見いだす。父の日がやってきて、セブは自分の工作を隣の老人ポールにプレゼントする。ある時にはコービュスが突然行方不明になり皆で

探し回るが、結局ポールが見つけてくれた。母親たちの友人ジャック（同性のニックと結婚している）が「ポールに感謝しなくちゃね。」と言い、皆はセブのうちでゆっくりワインを飲むことにする。

その場で一緒にワインを飲んでいたポールの奥さんアネマリーは、突然、彼らは結局のところ皆、自分と同じ「普通の人たち」なのだ、そして隣の女同士の夫婦に愛情深く大切に育てられたセブはとてもいい子なのだ、ということに気づく。家を出てから父の日にすら訪ねて来ない自分の子どもたちとは違い、セブは優しい少年で、夫のポールに自分が一生懸命作った飛行機をプレゼントしてくれた。

そして、急によそよそしくなって他の男の子と遊ぶようになっていたティビーは、ある日またセブと話をするようになった。二人は親友に戻ったのだ。

3. 日本語試訳

ここでは、物語の中での、四つの印象的な場面を取り上げ、日本語への翻訳を試みる。

最初に取り上げるのは話の冒頭の部分である。父の日が近づくにつれ、セブは憂鬱な気持ちになっていく。彼には父親がいない…母親は二人いるのだが。

(1) オランダ語原文 (p. 5)	日本語訳
<p>'Dat gedoe over Vaderdag,' moppert Sep. 'Tja,' zegt Tibby die naast hem loopt. 'Op mijn oude school deden we daar helemaal niets aan,' gaat Sep verder. Hij schopt een steentje weg dat in de grasstrook naast de stoep rolt. 'Jongens en meisjes ... ,' zegt Sep, de hoge stem van juf Mathilde imiterend,' ... over drie weken is het Vaderdag en natuurlijk gaan we weer wat voor onze lieve vaders knutselen.' Tibby grinnikt om zijn imitatie. 'Bedenken jullie alvast wat je wilt gaan maken?' vervolgt Sep. 'Nou, ze zei toch dat jij niets hoefde te bedenken, als je dat niet wilde. Jij hebt nu eenmaal twee moeders en voor hen heb je met Moederdag al wat gemaakt.' Sep zucht en knikt. 'Toen juf dat zei, keek wel de hele klas mijn kant op, hoor.' Ze lopen zwigend verder. 'Ik maak al wat voor papa en mama vanaf groep één,' zegt Tibby na een tijdje. Ze houdt niet zo van stiltes.</p>	<p>「父の日のごちゃごちゃが、めんどくさい」とセブは文句を言いました。 「そう?」と、ティビーがセブと並んで歩きながら言います。 「前の学校ではなんにもやらなかったんだよ」、セブは話を続けます。そして小石をけりました。石は歩道の脇の草むらに転がっていきます。 「皆さん!」とセブはマチルド先生の高い声をまねして、「あと三週間したら、父の日です。それで、もちろん、わたしたちは、お父さんのために何か作るんです。」 ティビーがその先生のものまねにニヤッと笑いました。 「皆さん、何を作るか考えましょう。」、とセブ。 「先生はさ、もしやりたくないなら、もちろんあなたは何も考えなくてもいいのよって。あなたにはママが二人いるんだし、ママたちにはもう母の日にちゃんと作ってあげたんだから。」 セブはためいきをついて、うなずきました。</p>

<p>'Mijn moeder bewaart alles. Ik heb een keer een doosje van ijsstokjes gelijmd. Heel geinig, met een los dekseltje en een dikke kraal als handvatje.'</p>	<p>「先生がそう言ったとき、クラス中がぼくの方を見たんだ…」 二人は黙って歩き続けます。 しばらくしてティビーが、「わたし、一年生のときから、もう何か、パパとママのために作ってるの。」二人はじっとだまっているのはあんまり好きじゃなかったのです。 「うちのママったらね、なんでもかんでもとっておくの。わたしね、一回、アイスの棒をのりでくっつけた箱を作ったことがある。それとは別に、手で持つ用に玉（ネックレスの一つ一つの玉のようなの）のついたふたといっしょに。すごく楽しかった。」</p>
---	---

父の日にお父さんたちにプレゼントするため、皆、何か工作をしろと言われて、セブは困惑している。その上、セブ君にはお父さんはいないから（お母さんは二人もいるんだけどね…）、いやなら別に皆と同じようにしなくてもいいのよ、などとクラスの皆の前で言われてしまう。

次に取り上げる場面には、セブの小学校の校長先生メルケルバッハ氏が登場する。セブの家庭に関しておかしな匿名の手紙が小学校に届いたことで、校長先生が家にやって来て、家にいた母親の一人、ロッテと話をすることになる。

(2) オランダ語原文 pp. 45 - 47	日本語訳
<p>'Mama, ik ben er.' Lotte zit op de bank met een meneer. 'O, hallo,' groet Sep. Dan herkent hij hem, het is meneer Merkelbach, het hoofd van Seps school. Wat komt die nou doen? 'Hoi Sep,' zegt meneer Merkelbach. 'Ga even zitten,' zegt Lotte tegen Sep. Ze geeft hem een kus. 'Wil je thee of limonade?' 'Doe maar limo.' Merkelbach roert in zijn thee. 'Hoe gaat het met je, Sep?' 'Heel goed,' zegt Sep aarzelend. Hij denkt aan het gedoe met Tibby, maar dat gaat Merkelbach niets aan. Lotte zet de limonade voor hem neer.</p>	<p>「ママ、ただいま。」 ロッテママは男の人と一緒にソファに座っています。「あ、こんにちは。」セブはその男の人が誰か気がつきました。セブの学校の、メルケルバッハ校長先生です。 「やあ、セブ君」と校長先生が言いました。「ちょっとここに座って。」とロッテママがセブに言います。 セブにおかえりのキスをします。「お紅茶がいい？それともレモネード？」 「レモネードにして。」 校長先生は自分のカップをかきまわしています。 「セブ君、どう、元気でやっていますか？」 「はい、すごく。」セブはおずおずと返事をします。</p>

<p>'Je vraagt je misschien af waarom ik hier ben,' zegt het schoolhoofd. Sep knikt. 'Ik wilde gewoon eens kennismaken met je moeder. Kijken hoe jullie hier wonen.' Sep neemt een slok van zijn limonade. 'O, oké!' 'Het gaat goed met je op school, hoorde ik van juf Mathilde.' 'Ja, hoor,' zegt Sep. 'We raken hier al helemaal ingeburgerd,' zegt Lotte. 'Ik ken natuurlijk nog wat mensen van vroeger, want ik ben hier geboren.' Merkelbach knikt. 'Vind je het leuk in ons stadje, Sep?' Sep knikt enthousiast. 'Ja, veel leuker dan in Amsterdam. Ik kan hier lekker buiten spelen en vissen.' 'Heb je al vrienden gemaakt?' 'Ja, Koen van verderop is mijn vriend en op school heb ik ook genoeg vriendjes.' Merkelbach knikt tevreden. Hij giet het laatste slokje thee naar binnen en staat op. 'Ik ga weer. Heb nog wat dingen te doen op school. Administratie enzo.' Hij geeft Sep en Lotte een hand. 'Ik zou me er verder maar niet druk om maken,' zegt Merkelbach tegen Lotte. Lotte knikt. 'U ziet dat wij het hier ontzettend naar onze zin hebben.' Merkelbach glimlacht. 'Ik weet zeker dat de mensen jullie wel zullen accept</p>	<p>ティビーとのごちゃごちゃをちょっと考えてみたのですが、でも、そんなこと、校長先生にはなんにも関係ないし。 ロツテママがレモネードをセプの前に置きました。 「なんで私がここにいるんだらうって思ってるんじゃないかな。」と校長先生が言います。 セプはうなずきました。 「ちょっとお母さんとお知り合いになりたいと思った。ここでどんな風に暮らしてるのか見てみたいなあ、って。」 セプはレモネードをごくつと飲みます。 「オ、オッケー。」 「担任のマチルド先生から聞いてるよ、学校でよくやってるって。」「はい」とセプ。 ロツテママが言います、「私たち、だんだん慣れてきました、もちろん前からいる人たちのことは知ってますし…私、ここで生まれたんです。」 校長先生はうなずきます。「セプ君、この町はいい所だと思いますか?」 セプは勢いよくうなずきます。「はい、阿姆斯特ダムよりずっといい。ここは外でいっぱい遊べて、釣りもできます。」 「もう友だちはできたかな?」「はい、このもうちょっと先に住んでる、クンが友だちです、それで、学校でも友だちが何人かいます。」 校長先生は満足そうにうなずき、紅茶を全部飲んでしまってから立ち上がります。 「そろそろ失礼します。学校でまだやることがあつて…事務的なこととか。」 校長先生はロツテママと、それからセプと握手をして、ロツテママに「心配しないでくださいね。」と言いました。 ロツテママがうなずきます。「ここで楽しく暮らせています。」 校長先生はにっこり笑いました。「きっとこの人たちに受け入れてもらえますよ。」</p>
--	---

校長先生は、セプ一家の事情をよくわかってくれて、何も問題はないからと言い、学校へ戻っていく。

その数行後ろにあるのが、次の会話が交わされる場面である。

(3) オランダ語原文 p. 47	日本語訳
<p>'Wat is er, mam?'</p> <p>'Ik zal het je maar eerlijk vertellen. Er zijn mensen die over ons roddelen.'</p> <p>'O,' zegt Sep.</p> <p>'Ja, iemand heeft een brief geschreven naar de school en daar stond in dat Maartje en ik je niet goed opvoeden en dat je misschien wel eens door ons geslagen wordt.'</p> <p>Sep springt op. 'Wat gemeen!' roept hij uit.</p> <p>'Ik heb lang met Merkelbach gesproken. Hij denkt ook dat de brief kwaadaardige roddel is.'</p> <p>'Mama, jij bent de beste opvoeder van de wereld.'</p> <p>Daar moet Lotte om lachen. 'Nou, dat weet ik niet, hoor. Maartje en ik doen gewoon ons best.'</p> <p>Ze geeft Sep een dikke knuffel. 'Laten we het maar vergeten.'</p>	<p>「どうしたの、ママ？」</p> <p>「あなたにちゃんと話しておく。うちのこと、いろいろ悪口<small>わるぐち</small>を言う人たちがいて。」</p> <p>「あー、」</p> <p>「そうなの。誰かがね、学校に手紙<small>てがみ</small>を出した。その手紙には、マールチェと私があなたをちゃんと育ててないって、それで、ひよっとしたらあなたが私たちにたたかてるかも…って書いてあった。」</p> <p>セプは飛び上がり、「なんて卑怯<small>ひきょう</small>な！」と叫びました。</p> <p>「それで校長先生<small>なが</small>と長い時間話してた…校長先生もその手紙はひどいでたらめだと思ってる、って。」</p> <p>「ママ、ママは世界一のお母さんだよ。」</p> <p>ロツテママは笑いました、「それはわかんないけど。でもマールチェも私もほんとに一生懸命<small>しょうけんめい</small>やってるの。」</p> <p>ロツテはセプを強く抱きしめます。「このことは忘れてしましましょう。」</p>

セプがおかしな家庭で虐待されているのではないか、というのである。家庭内で体罰として子どもを叩くという行為は、欧州では明らかな身体的虐待であり、犯罪と見なされる。

なお、原文では日本語訳の「お母さん」に相当する単語には *moeder* ではなく *opvoeder* という単語が使われているが、これにはジェンダー、つまり男性か女性か、を想起させる要素はない。直訳であれば「育てる者」「(学校制度の枠組みではなく家庭での)教育者」「養育者」という意味になる。要するに「世界一の親」だと言っているのだが、これを小学4年生程度の男の子に興奮気味に言わせるのは無理があるのではないかと、訳者は考えた。親を「オヤ」と表記する方法もあったかもしれないが、結局日本語では視覚的にも聴覚的にも馴染みのある「お母さん」ということばを使うことにした。

最後に以下の場면을挙げる。ここでは、日頃セプ親子たちに氷のような視線を向け、セプに冷たく接していた隣の奥さんアネマリーが、ワインを飲んでいた時に「溶けた」んじゃないか、という話をセプがモルモットにしている。

(4) オランダ語原文 pp. 99-100	日本語訳
<p>'Weet je wat Maartje vanmiddag over Annemarie zei? Dat ze op zaterdagavond na een paar wijntjes ontdooidde. Ik wist helemaal niet dat ze bevroren was geweest. Hahaha. Lotte zei dat Annemarie altijd koud en keihard is, net als ijs in de sloot als het streng gevroren heeft. Maar na die wijntjes deed ze ineens aardiger. Ik dacht nog, misschien is er van haar alleen nog maar een plasje water over. Dan kan Paul haar opdweilen en door de gootsteen spoelen en misschien daarna met oma trouwen.' Kobus piept. Het lijkt wel afkeurend, maar dat is natuurlijk verbeelding. 'Het is maar een grapje hoor, Kobus. Weet je wat ik toen heb gedaan? Ik was het al een tijdje van plan, maar ik wist niet zeker of ik het wel zou doen.</p> <p>Maar toen Pauls kinderen niet kwamen, wist ik het zeker. Ik heb mijn vliegtuigje opgehaald. Je weet wel, dat dubbeldekkertje dat ik gemaakt heb. Ik heb dat aan Paul gegeven voor zijn Vaderdag. Vind je dat gek? Paul was er blij mee.</p> <p>Hij probeerde het te verbergen, maar hij kreeg tranen in zijn ogen. Toen kwam Annemarie naar buiten en die drukte me zomaar tegen zich aan en zei: "Malle jongen."</p>	<p>「お昼にね、マールチェママがアネマリーお婆さんのことであんな言ってたか、知ってる? お婆さん、土曜の晩にワイン飲んだ後、溶けちゃったんだって。元々お婆さんが凍ってたなんて、全然知らなかった。ハハハ。ロツテママは、お婆さんはいつもすごく冷たくてかちこちで、まるで水みたいだったって。でも、ワインを飲んだ後、急にやさしくなった、って。ほく、溶けちゃったんなら、水たまりしか残らないから、そしたらポールおじさんはそれを拭きとって、溝に流して、それでその後、うちのお婆あちやんと結婚するとかどうかなあ、って思った。」コービュスはピーッと鳴いた。「そういう考えはよくないよ。」と言ったみたいだった。「ただの冗談だよ、コービュス。ねえ、それでほくが何をしたか知ってる? ずっと計画はしてたんだけど、ほんとにやるかどうか、決めてなかったんだ…。</p> <p>でもね、ポールおじさんの子どもたちが来なかったときに、よし絶対やろう、と思った。ほくが作った飛行機をとりに行って、ほら、あのダブルデッカーの。父の日にあれをおじさんにあげた。それってばかみたいかな? でもおじさんは喜んでた。</p> <p>隠そうとしてたけど、おじさんの目に涙が出てた。それで、表にお婆さんが出てきて、ほくにハグして言ったんだ、『この子ったら。』って。」</p>

ちなみに、オランダ語での「氷が（冷たく固い態度・性格が）溶ける ontdooiden（英語の thaw）」という表現をここで用いたのは特にこの作者の独創的な発想というわけではなく、日常的な会話で耳にするレベルのものである。そういう意味では使い古された言い方 - cliché - であるが、ただその直後、セプが「氷が溶けたら水たまりになる」と言うのは非常にユニークな発想で、そこに原文の中に基調として流れるユーモアと作者のこぼ遊びの巧みさを感じることができる。残念ながら日本語にはそのユーモラスな調子が上手く訳出されているとは言い難い。

4. 読了・試訳後

欧州—ここでは特にオランダとベルギー^{xx}—と日本の文化的・社会的背景・現代社会事情の相違から、特に児童文学においては日本語に訳出するのが容易ではないと思われる描写もある。例えば、主人公の少年セプが自分の生物学上の父親について、飼っているモルモット(名前はコービュス)に説明をする場面がある。以下に引用し、小学生用ではない、ほぼ直訳を載せる。なお、ジャックとニックはどちらも男性の同性婚で、セプの母親たちであるマールチェとロッテのカップルの友人である。

オランダ語原文 p. 94	日本語訳
<p>Jack en Niek zijn hele leuke mannen. Weet je dat ik een tijdje heb gedacht dat Jack mijn vader was, maar dat is echt niet zo. Het zaadje dat Lottes eitje bevruchtte komt van de spermabank. Daar is de naam van de donorvader bekend en als ik zestien ben, mag ik die weten. Maar dat heb ik je zeker al heel vaak verteld?¹ Kobus piept.</p>	<p>ジャックとニックはすごくいい男の人たちだ。ねえ、知ってる? ぼくはジャックが自分の父親じゃないかって考えていた時期があったんだ、でも、そうじゃなかった。ロッテの卵子を受精させた精子は、精子バンクから来たんだ。そこでは、そのドナーの父親の名前がわかってる。僕が16歳になったら、僕はそれが誰なのか、知ることができる。でもこのことは、きっと、もう何回も話してるよね。 コービュスはピーッと鳴いた。</p>

もう一つの場面を紹介する。ここでは、セプが、母親たちと、同性愛者であること、セプを産んだことについて話をする。母親二人の会話も興味深い。

オランダ語原文 pp. 23-24	日本語訳
<p>'Wanneer wist je eigenlijk dat je lesbisch was?' vraagt Sep aan Lotte. 'O, heel snel. Al kende ik dat woord niet. Ik was in mijn jeugd net een jongen. Ik voetbalde met de jongens in de straat, ik klom in bomen. Ik vond jongens heel stoer, maar werd dus op meisjes verliefd. Het werd niet gek gevonden als ik een vriendin had. Dat was tenslotte zoals het hoorde, maar ik vond niets aan het spelen met poppen.' 'Ik was heel anders,' zegt Maartje. 'Ik speelde graag met vriendinnetjes en ook met poppen</p>	<p>「実際、いつ自分がレズビアンだってわかったの?」とセプはロッテに尋ねた。 「ああ、すごく早いうちに。まだそんなことばも知らないうちにね。私は子どもの頃男の子みたいだった。男の子たちと路上でサッカーしたり、木登りしたり。男の子は強くていいなあとは思ったけど、好きになるのは女の子だった。女の友だちがいるのは、誰も変だと思わない、友だちは当たり前なもの。でもお人形遊びはおもしろくなかった。」 「私は全然違った、」とマールチェが言った。「私は大好きだった、女の子同士でお人</p>

<p>en fornuisjes en pannen.' 'Maartje is veel moederlijker dan ik,' vindt Lotte.</p> <p>'Waarom ben jij eigenlijk mijn biologische moeder niet geworden?' vraagt Sep aan Maartje.</p> <p>'Lotte kan beter tegen pijn en bevallen is toch pijnlijk.</p> <p>Trouwens als er een kind uit mij was geboren, dan was jij dat niet geweest, maar heel iemand anders.'</p> <p>'Dat is ook zo,' zegt Sep.</p> <p>'Met die pijn viel het wel mee,' vindt Lotte. 'Ik kreeg een ruggenprik, weet je nog.'</p> <p>'Ja, daar heb je gelijk in.'</p> <p>'Ik wilde mijn vriendinnetjes ook graag een kus geven,' gaat Lotte verder, 'maar dat kon natuurlijk niet.'</p> <p>Maartje kijkt haar fronsend aan. 'Hoeveel van die vriendinnetjes heb je eigenlijk gehad?'</p> <p>'Een stuk of wat. Ik werd snel verliefd.'</p>	<p>形遊びしたり、ガスレンジだとかフライパンだとかで遊ぶの。」「マールチェは私よりずっと母親らしい」とロツテ。</p> <p>「じゃあ、なんでマールチェママが僕の生物学上の母親にならなかった（訳注：なぜ自分で産まなかった）の？」セブはマールチェに訊いてみた。</p> <p>「ロツテの方が痛みに強いし、それに、やっぱりお産は痛いものだから。それにもし、赤ちゃんが私のお腹から出てきてたら、それはあなたじゃなくて他の誰かっていうことになってたでしょ？」</p> <p>「そうだね、」とセブ。</p> <p>「痛みは、まあ、なんとかなった」とロツテ。「背中に注射してもらって（訳注：硬膜外麻酔のこと）。」「あなた、覚えてるでしょ。」</p> <p>「そうだったわね。」</p> <p>「女の子の友だちにキスしたかった、」ロツテが話を続けます。「けどもちろんそんなことはできなかった。」</p> <p>マールチェはしかめっ面になった。「あなたいったい今まで何人ガールフレンドがいたの？」</p> <p>「まあ、そこそこ。私、惚れっぽかったの。」</p>
--	--

男の子と外遊びをするのが好きで、人生の早い段階ですでに自分は女の子が好きだと気付いていたロツテ。対して、マールチェは女の子同士で女の子らしい遊びをするのが好きだった。ロツテには同性の vriendinnetje(s) 友人がたくさんいたらしい。そしてこの単語はオランダ語で二つの意味に取れる。同性の友人という意味と、好きになる対象としてのガールフレンドという意味である。男の子同士の場合と違い、仲の良い女の子同士が日常的に常に行動を共にし、その中でお互いに対して親密な雰囲気の中で親しげにふるまうのはごく普通のことと見なされる。ところがそれが恋愛対象として、となると、それは理解され難い。ロツテは女の子にキスしたいとは思っても、それを実行に移すことはなかった。いくら親しくてもそれはおかしいと思われる、ということは当時わかっていたからである。

さて、すでに二十年前となる 2000 年に同性結婚法が成立し、2001 年 4 月 1 日に同法律が施行されたオランダでは^{xxi}、上記のような日常会話がごく現実的なものとなっている。セブの同性の両親は息子の前でも、また現在のパートナーに対しても、非常にあけすけに自身の同性愛者としての恋愛体験を語っている。

既に読者レビューで述べられていることであるが、再度、筆者の読後の感想として特筆すべきことがある。本作品は LGBT の人々も普通の人たちなのだ、というメッセージを発信しているのだが、ストーリーの全編を通して見えるのは、基本的に、穏やかなユーモアと市井の人々の普通の暮らしの丁寧な描写である。時には不愉快な人間関係が描かれたり登場人物が驚くような出来事も起こるが、それもやがて何らかの形で日々の暮らしの中で落ち着き、人々は穏やかな日常生活へと戻っていく。ある特定のグループの価値観を前面に押し出して主張するわけではなく、話は淡々と進んでいく。その結果、物語は却って身近で確かな現実味を帯び、読者はこの物語の中に引き込まれて、これが自分には馴染みのない世界観・価値観を伝える手段であるという側面を直接意識しない仕組みなのではないかと記者は考察する。

全体として、翻訳の技術的観点から述べると、本作品の対象読者は 8 歳から 12 歳の児童であるとされているが、これはだいたい日本の小学生低・中・高学年に相当する。そして日本語では、各学年での漢字の習熟度によってどのような表記をするか、実際には大きな違いがある。特に低学年と高学年では読める漢字の数に大きな差があり、表記の方法を変える必要があるのではないかと翻訳作業中に何度も考えたが、ではどのような工夫をするか、という段になると、今回は初出の漢字にルビを振る以外、それに対する効果的な方法を見つけないまま終わってしまった。またオノマトペ(擬音)、具体的にはモルモットの鳴き声をどう訳出するのも大きな課題として残った。自身の子どもの学校で飼育していたモルモットを夏期休暇中に自宅で預かった経験はあるのだが、モルモットはほとんど鳴かない動物であるというのが当時得た印象であった。作中、コーピュスが「piept ピープト」するが(動詞 piepen が原形)これは「ピーッと」なのか「キーツと」なのか、あるいは「ピキーツと」なのか、記者の中ではついに気持ちが定まらないまま、結局音声的に最も近いように感じられた「ピーッ」という音でコーピュスには鳴いてもらうこととした。

このように訳出の方法でどのような表現を選択するか、記者の迷い、心の葛藤の例は枚挙にいとまがないが、作業にスピードと正確さが最優先で要求される実務翻訳とは異なる点が文芸翻訳には重要な要素となり得るのだということが実感できたのは、大きな収穫であった。

IV. おわりに

オランダ語の児童図書は日本で馴染みがないように思われているかもしれないが、例えば、ディック・ブルーナの絵本ミッフィーちゃん、ベルギー・フランス語圏のタンタン等、そうとは知られないままに、日本に浸透しているキャラクターなどがある(国際子ども図書館第二資料室小展示)ので、そこから出発して、さらに本格的に彼の地の文学作品に触れるため、より多くの作品が翻訳されることが望まれる。日本の若い世代で、英語だけでなく、外国語としてのオランダ語の学習者が増加することを期待してやまない。

本稿冒頭で述べたように、ほぼ実務翻訳や交渉・講演会通訳等の経験しかない筆者が今回、未経験のジャンルの本作品を読了した後で、限られた数の場面であるが翻訳を試みたこと、それは新鮮で、得難い経験であった。

最後になりましたが、この機会を与えてくださったオランダ王国大使館ならびにプライドハウス東京の皆様へ深く感謝申し上げます。

参考文献

- De Taalunie (the Dutch Language Union). Retrieved on November 1, 2019 from <http://taalunieversum.org/inhoud/general-information-english>
- Donaldson, B. (2013). Dutch. A linguistic history of Holland and Belgium. Leiden: dbnl. Retrieved on November 1, 2019, from http://dbnl.org/tekst/dona001dutc02_01/colofon.php
- Educatie in de klas Website. (Leesbevordering in de klas). Retrieved on June 1, 2019 from <https://leesbevorderingindeklas.nl/book-review/cavia-en-twee-moeders/>
- Feller, P. Website. Retrieved on December 1, 2019 from <https://www.pieterfeller.nl/>
- Xanten Uitgeverij (Publisher). Retrieved on November 1, 2019 from <https://www.uitgeverijxanten.nl/auteurs/pieter-feller/>
- オランダ王国大使館・領事館・名誉領事館ウェブサイト 「オランダとわたし」
<https://www.orandatowatashi.nl/orandatowatashi-nl-%E3%81%AB%E3%81%A4%E3%81%84%E3%81%A6>
(2019年9月1日閲覧)
- 国際子ども図書館 (2011). 「国際子ども図書館講演会記録-今、オランダ・ベルギーの子どもの本は？」
国立国会図書館 <https://www.kodomo.go.jp/event/event/backnumber.html>
(2019年10月1日)
- 国際子ども図書館 第二資料室小展示 (2009).
https://www.kodomo.go.jp/event/exhibition/pdf/2009.5Netherlands_ver2.pdf#search=%27
国際子ども図書館+第二資料室+オランダの児童書%27 (2019年10月1日)
- さくま ゆみこ 著 (2016). 「絵本や児童文学における新しい家族のかたち」 総合文化研究所年報
第24号 pp.5-26
- 桜田 美津夫 著 (2017). 「物語 オランダの歴史 (中公新書)」 中央公論新社
- ドナルドソン、B. C. 著、石川 光備・河崎 靖 訳 (1999). 「オランダ語誌—小さな国の大きな言語への旅」 現代書館
- ニジビ (LGBT 転職就活ノウハウ「nijipi」—LGBT の就職応援情報サイト) 「世界一 LGBT に優しい国、オランダ」 <https://nijipi.lgbt/life/3742> (2019年7月1日)
- HUFFPOST. 「前首相もゲイを公表。当たり前前に LGBT が暮らす、ベルギーの『プライド』が大切にしていること (2016年5月5日)」 (2019年7月1日)
- 松尾 秀哉 著 (2014). 「物語 ベルギーの歴史 (中公新書)」 中央公論新社

資料

1. 国際子ども図書館講演会記録(2011年)

国際子ども図書館講演会記録

シリーズ・いま、世界の子どもの本は？

第5回

第一部

オランダとベルギーの子どもの本は、いま (要旨)

平成23年7月23日

講師：野坂悦子

はじめに

今日は「オランダとベルギーの子どもの本は、いま」ということでお話しさせていただきます。

オランダという国の人口は1,660万人です。ベルギーは約1,000万人で、ベルギーの人口のうち約600万人がオランダ語圏、そして約400万人がフランス語圏にいます。(ごく一部ドイツ語圏もあります。)したがって、ベルギーの絵本について話す場合は、オランダ語圏とフランス語圏、両方の絵本の流れをお話ししなければいけません。

オランダとベルギーは、神聖ローマ帝国の支配下にあった時代は「ネーデルラント」と呼ばれる一つの地域でした。しかしオランダは早くも17世紀に独立します。一方、様々な変遷を経て、ベルギーが独立国となったのは1839年であり、ベルギーのほうが国の成り立ちが新しいのです。様々な事情から、ベルギーは第二次世界大戦後の児童書の発展において、オランダに遅れをとりました。しかし、今まさに開花期を迎えています。私はオランダ語が専門なので、まずオランダ語圏の児童文学を中心にお話ししたあと、ベルギーのフランス語圏の児童文学に少し触れ、キティ・クローザーさんの講演への導入とさせていただきます。

1. オランダの児童文学

- 『イップとヤネケ』(アニー・M.G.シュミット作、岩波書店、2004年)
- 『ネコのミヌース』(アニー・M.G.シュミット作、徳間書店、2000年)

アニー・M.G.シュミット(原語読みだと、エム・ヘー・シュミット)は、国際アンデルセン賞作家賞を1988年に受賞したオランダを代表する書き手です。前者は、戦後すぐの1950年代に新聞の連載から始まり、オランダ人だったら知らない人はいないほど良く知られたシリーズです。1970年に出版された後者も大変人気があります。シュミットの作品はベルギーでもよく読まれ、今では日本語でも読むことができるようになりました。

- 『王への手紙』上下巻(トンケ・ドラフト著、岩波書店、2005年)

日本で出版されたのは数年前ですが、オランダでは長く愛読されている騎士物語です。

この本は、オランダ「金の石筆賞*」50周年を記念した「金の石筆の中の金の石筆」賞に選ばれました。ドラフトの作品は、この本を皮切りに、次々と岩波書店で翻訳が続いています。
(*創立時の名称は「年間児童書賞」)

- 『不幸な少年だったトーマスの書いた本』(フース・コイヤー著、あすなろ書房、2008年)
- 『ひみつの小屋のマデリーフ』(フース・コイヤー文、国土社、1999年)
コイヤーは学校の教師から出発し、作家になりました。小学校を舞台にした作品、動物を主人公とする作品物、寓話など作品は幅広く、どれもエンターテインメント性と文学性を兼ね備えています。大人の本も書き、いろいろなジャンルに挑戦する作家です。
- 『夜物語』(パウル・ピーヘル作、徳間書店、1998年)
ピーヘルは素晴らしいファンタジーの作家です。毎年少なくとも一作はホラント出版のために書き続け、生涯に80点以上の作品を残しました。日本でもこの他にも何作か出ていて、いま私がまた新しい作品『ネジマキ草と銅の城』を訳しているところです。
- 『第八森の子どもたち』(エルス・ペルフロム作、福音館書店、2000年)
ペルフロムは金の石筆賞を3回受けた、オランダを代表する児童文学者です。この作品は、第二次世界大戦のとき、アルネム郊外の農家に疎開したノーチェの物語で、少女の目から見た戦争を子どもらしい自由な感覚で描いています。
- *Heb je mijn zusje gezien?* (私の妹を見た?) / Joke van Leeuwen. Querido, 2006
- 『みんながそろろう日：モロッコの風のなかで』(ヨーク・ファン・レーウエン、マリカ・ブライン作、鈴木出版、2009年)
20代のとき、彗星のように児童文学界に登場したファン・レーウエンは、絵も文も自分で書くダブルタレントの持ち主です。ウィットに富んだその作品は、常に暖かなヒューマニズムに貫かれています。オランダで生まれ、ベルギーで育ち、現在はベルギーのアントワープに住むファン・レーウエンは両国の橋渡し役ともいえる作家です。
- 『りんごちゃん』(ディック・ブルーナさく、講談社、1981年)
- 『ちいさなうさこちゃん』(ディック・ブルーナ文・絵、福音館書店、昭和39年)
- 『うさこちゃんとふがこちゃん』(ディック・ブルーナ ぶん/え、福音館書店、2011年)
ディック・ブルーナは、1955年に最初の絵本『りんごちゃん』を私家版で出しました。その後、1963年に『Nijntje』を出版社より出し、日本では1964年に『ちいさなうさこちゃん』と訳されて、世界でもいち早く紹介されました。オランダの絵本作家の中で、もっとも良く知られた存在がブルーナですし、世界の中でも、もっとも良く知られた絵本作家もありません。
- 『たいせつなてがみ』(マックス・ベルジュイス絵と文、セーラー出版、2011年)
- 『かえるくんどうしたの』(マックス・ベルジュイス文と絵、セーラー出版、1990年)
もう一人、オランダで忘れてはいけない絵本作家はマックス・ベルジュイスです。代表作は、1989年からスタートして全12冊出した「かえるくん」のシリーズです。国内外での評価の高まりを受け、2004年、ベルジュイスは国際アンデルセン賞画家

国際子ども図書館講演会記録

賞を受賞しました。オランダの世界的な作家という点、先ほどのアニー・M.G.シュミットとマックス・ベルジュイスの二人が、よく並び称されます。

- 『小さな可能性』(マルヨライン・ホフ作、小学館、2010年)
最近の動きとして、新人作家を二人ご紹介します。一人はマルヨライン・ホフで、この本は去年、小学館から出ました。戦場に行ったまま消息不明になった医者のお父さんを、不安な気持ちで待つ女の子を主人公にしています。不安と向き合う少女の心理を掘り下げて描いた、新しいタイプの作品です。2007年に金の石筆賞を取りました。
- 『コブタのしたこと』(ミレイユ・ヘウス作、あすなろ書房、2010年)
こちらは2006年に金の石筆賞を取った作品です。「悪」を内在したコブタという少女と、障害を持つ主人公のリジーがどう付き合っていくか。リジーがコブタの力から逃れ、自分を見つけていくまでの過程を描きます。最近のオランダ語圏の児童文学界では、このようにテーマ性・問題性の強い内容を、文学的な言葉で、しかも比較的短い分量でまとめた作品が目立つようになりました。

2. ベルギーの児童文学

- 『フランデレンの獅子 De leeuw van Vlaanderen』(ヘンドリック・コンシャンス作 1838年)
ベルギー児童文学は、この本によって始まったといわれます。ベルギーの独立が1839年、そのまきに前年に出た作品です。当時ベルギーの支配階級はフランス語を話していましたが、庶民によるオランダ語運動が盛り上がり、「フランデレンの獅子」はそんなさなかに書かれました。当初は大人の作品だったのですが、子どもたちに今も読み継がれている、記念碑的な作品です。

その後20世紀に入ると、ベルギー・オランダ語圏にも専門の児童書出版社が設立され、素敵な絵本が次々と生まれてきました。

- 「タンタン」シリーズ(1930年～)
- 「ススカとウィスカ Suske en Wiske」シリーズ(1945年～)
ベルギーを特色づける児童文化、それは漫画です。1930年にスタートした、エルジェによる「タンタン」シリーズは、フランス語圏を代表する漫画だとすれば、オランダ語圏では「ススカとウィスカ」というシリーズが1945年に始まりました。「タンタン」はエルジェが亡くなった段階で、シリーズとして完結しましたが、「ススカとウィスカ」は作者のウィリー・ヴァンデルステーンが亡くなった後も、プロダクションにより製作が継続し、今でも新作を買うことができます。ベルギーとオランダの両国で、人気の高いシリーズです。
- 『調子っぱずれのデュエット』(バルト・ムイヤールト作、くもん出版、1998年)
ローマン・カトリックの影響を強く受けていたベルギーでは、離婚や死といったテ

マについて書きづらい時期がありました。1970年になると大分自由になってきます。社会派の作品があらわれ、80年代には質の高い作家の数も増え、いよいよ児童文学が盛んになってきます。その動きを象徴的するのが、バルト・ムイヤールトです。1983年、17才のときに『調子っぱずれのデュエット』でデビューし、その後、小説の作法をイギリスの作家エイダン・チェンバーズに学んで、今では大物作家に成長しています。彼の本はベルギーの出版社からではなく、より大きな販路を持つオランダのケリド出版から数多く出ています。

- 「きつねのフォスとうさぎのハース」シリーズ（シルヴィア・ヴァンデンヘーデ作、岩波書店、2007年～）
- 『シェフィーがいちばん』（カート・フランケン文、BL出版、2007）
- 『シェフィーはがんばる』（カート・フランケン文、BL出版、2010）

1990年代以後、特に2000年を過ぎると、ベルギー・オランダ語圏で出版されたベルギー作家の本も、オランダで普通に読めるようになりました。そんな中、シルヴィア・ヴァンデンヘーデ、カート・フランケンといった作家があらわれ、オランダの画家と組んで仕事をしています。その作品は、ベルギーとオランダの両方で大勢の読者を獲得し、翻訳出版されて、世界に広がっています。

現代ベルギーの絵本作家たち

イングリッド・ゴドン

- 「ネリーとセザールのちいさなおはなし」シリーズ
カルル・クヌート

- *Eén miljoen vlinders* (100万匹のチョウチョ) / Edward van de Vendel, met illustraties van Carl Cneut. Eindhoven, c2007
- *Dulle Griet* (狂女フリート) / Geert De Kockere ; met prenten van Carl Cneut. Eindhoven, c2005

「狂女フリート」はピーテル・ブリューゲルの絵を基にした絵本です。ネーデルラントは伝統的に絵画で知られた地域であり、ブリューゲルはもとより、新しいところではメムリンクとかアンソールも有名です。ベルギーのオランダ語圏の絵本作家の特徴は、ブリューゲルなどの古い技法を徹底的に学んだところから、新しいものを作っていく点にあります。クヌートには、日本語になっている作品も何点かあります。

クラス・ヴェルブランケ（フェルブランケ）

- 『アップルムース』（クラス・フェルブランケ作・絵、朝日学生新聞社、2011年）
2001年にボローニャ児童図書展のボローニャ・ラガッツィ賞を受賞したヴェルブランケ（フェルブランケ）は、若手のホープと言えます。プラチスラヴァ世界絵本原画展で受賞した、先ほどのカルル・クヌートと並んで、ベルギーのオランダ語圏の絵本界を国際的にリードする存在です。

ヒド・ファン・ヘネヒテン

- 『わらって!リッキ』（ヒド・ファン・ヘネヒテンさく・え、フレーベル館、2001年）

国際子ども図書館講演会記録

ファン・ヘネヒテンは、ベルギーやオランダのみならず、世界中の子どもたちに愛されている絵本作家です。日本でも数多く紹介されています。最近ではコミシパイも手掛けるようになりました。

ガブリエル・バンサン

- 『くまのアーネストおじさんあめのひのピクニック』(ガブリエル・バンサンさく、ブック・ローン出版、1983年)
- 『アンジュール：ある犬の物語』(ガブリエル・バンサン作、ブックローン出版、1986年)
- 『たまご』(ガブリエル・バンサン作、ブックローン出版、1986年)

1981年、54歳のとき、『くまのアーネストおじさん かえってきたおにんぎょう』でデビューしたバンサンは、50点以上の絵本を残しました。優しいタッチの確かなデザインで知られますが、ベルギー・フランス語圏の絵本界で、アウトサイダーを物語に登場させ、消費社会に対して批判的な目を向けた最初の作家だとも言われています。『アンジュール：ある犬の物語』では捨てられた犬が主人公ですし、「アーネストおじさん」も決してお金持ちではなく、いつも食べることに苦勞しています。『たまご』という原子力発電所の問題を象徴するような、重いテーマのある作品も書いています。

キティ・クローザー

ベルギー北部のオランダ語圏、フランドル地方では斬新な現代性が高く評価される傾向があります。一方、南部のフランス語圏は文化混交の地であり、色々な風が吹く中で、海外から来たパートナーと協力し合い、自由に作品を作ってきた地ではないかと思えます。

キティ・クローザーさんは、「線の魔術師であり、雰囲気を作ることに非常に長けている。絵本の伝統を守りつつ、それを変化させて革新させている。彼女の世界は想像力と現実の間の扉が大きく開いていて、一人一人の読者に向かって優しく語り掛けているけれども、非常に奥深く響く。困難な状況にある人たちに心からの共感を寄せ、弱さが強さに変わるところを見せてくれる。ヒューマニズムとシンパシーが現実化してアートと一体化している」という評価を受け、2010年のアストリッド・リンドグレーン記念文学賞を受賞したと聞いています。何より、子どもたちの信頼を絶対に裏切らない。その子どもたちへの愛というか、弱い者に対するエールが、キティ・クローザーさんを支えてきたのでしょう。バンサンとも共通するこの傾向は、もしかしたら、ベルギー・フランス語圏の絵本の伝統と言えるものなのかもしれません。

ちょうど時間になりました。これからキティさんに絵本作家として伝えたいことをお伺いしたいと思います。どうもありがとうございました。

2. オランの児童書

国際子ども図書館
第二資料室小展示
2009.5.21～7.14

オランダの児童書

2008年および2009年は日本オランダ年です。2008年は日蘭修好通商条約が締結されてから150周年、そして、2009年は徳川家康が日蘭貿易を開始してから400周年という節目の年にあたります。日本オランダ年2008-2009にちなみ、国際子ども図書館で所蔵するオランダの児童書の一部を紹介します。

(カッコ内は当館の請求記号)

- 1) Guus Kuijer ; van Mance Post *"Krassen in het tafelblad"* 1998, c1978 (Y8-A2927)
邦訳：『ひみつの小屋のマデリーフ』(Y9-M99-198)
★1979年に金の石筆賞を受賞。
- 2) van Rie Cramer *"Het jaar rond (一年間)"* [1982?] (Y17-B9338)
※一年を通じた子どもたちの生活や遊びを描く。
- 3) Imme Dros ; van Harrie Geelen *"Ik wil die!"* c1991 (Y17-A3358 ; Y17NL-G297-A3358)
邦訳：『リサのあかいくつ』(Y18-8258)
- 4) Annemie & Margriet Heymans *"De prinses van de moestuin"* c1991 (Y17-A3461 ; Y17NL-H618-A3461)
邦訳：『ハンナのひみつの庭』(Y18-M99-174)
- 5) Marit Tornqvist *"Klein verhaal over liefde"* 2000, c1995 (Y17-A7234 ; Y17NL-T686-A7234)
邦訳：『愛についてのちいさなおはなし』(Y9-M99-26)
★1996年に銀の石筆賞を受賞。
- 6) Sjoerd Kuyper ; van Sandra Klaassen *"Robin en God (ロビンと神様)"* c1996 (Y8-A3412)
★1997年に金の石筆賞を受賞。
- 7) Annemarie van Haeringen ; Sjoerd Kuyper *"Malmok (マルモック)"* 1999, c1998 (Y17-A7236 ; Y17NL-H136-A7236)
★1999年に金の絵筆賞を受賞。
- 8) Rindert Kromhout ; Annemarie van Haeringen *"Een grote ezel"* 2003 (Y17-B3690 ;

国際子ども図書館
第二資料室小展示
2009.5.21～7.14

Y17NL-H136-B3690)

邦訳：『おおきくなりたいちびろぼくん』(Y18-N01-537)

9) Mensje van Keulen ; Jan Jutte *"Tien stoute katjes"* 2004 (Y17-B3998 ; Y17NL-J96-B3998)

邦訳：『10 ぴきのいたずらねこ』(Y18-N03-H53)

★2001年に金の絵筆賞を受賞。

10) Sjoerd Kuiper ; Jan Jutte *"Een muts voor de maan"* 2004 (Y17-B3999 ; Y17NL-J96-B3999)

邦訳：『おつきさまにぼうしを』(Y18-N07-H92)

★2004年に金の絵筆賞を受賞。

11) Annemarie van Haeringen *"De prinses met de lange haren (髪の長いお姫さま)"* 2004 (Y17-B3995 ; Y17NL-H136-B3995)

★2000年に金の絵筆賞を受賞。

12) Hanna Kraan ; van Annemarie van Haeringen *"De boze heks is weer bezig (邪悪な魔女がふたたびやってきた)"* 2004 (Y8-B6348)

13) Han G. Hoekstra & Fiep Westendorp *"Rijmpjes en versjes uit de nieuwe doos"* 2005 (Y17-B7902)

14) Sylvia Vanden Heede ; van The Tjong-Khing ; *"Vos en Haas en de dief van Iek (フォスとハースとイエクの泥棒)"* c2005 (Y17-B10123)

★2006年に銀の石筆賞を受賞。

15) Thea Beckman ; van Ingrid en Dieter Schubert *"Een bos vol spoken (幽霊の森)"* 2006 (Y8-B6426)

16) Paul van Loon ; van Camila Fialkowski *"De griezelbus 1"* 2007 (Y8-B6950)

邦訳：『ホラーバス. 1』(Y9-N07-H284)

17) Marjet Huiberts ; Sieb Posthuma *"Feodoor heeft zeven zussen (フェオドールの7人のおねえさん)"* 2007 (Y17-B9807 ; Y17NL-P857-B9807)

★2007年に銀の絵筆賞を受賞。

◇Dick Bruna

2001年にオランダの一般市民に与えられる最高の王室勲章「オランダ獅子勲章コマンドユーール賞」を受勲。

日本でおなじみの『ちいさなうさこちゃん』（福音館書店 1964年初版）は売上げ100万部以上というミリオンセラーの絵本。原書のオランダ語の名前は「Nijntje」。

18) *"Nijntje in de tent"* 2000, c1995 (Y17-A7238)

邦訳：『ミッフィーのたのしいテント』（Y18-10703），『うさこちゃんのでんと』（Y18-N08-J259）

★1996年に銀の絵筆賞を受賞。

19) *"Lieve oma Fluis"* 1998, c1996 (Y17-A3353)

邦訳：『ミッフィーのおばあちゃん』（Y18-M97-49），『うさこちゃんのだいすきなおばあちゃん』（Y18-N08-J358）

★1997年に銀の石筆賞を受賞。

20) Joke Linders ... et al. *"Dick Bruna"* c2005 (YZ-B1414 ; YZ-726.6B-B17)

※ディック・ブルーナの業績を豊富な図版、写真と共に紹介。巻末に略歴、出版年表あり。

◇Peter Spier

オランダのアムステルダム生まれ。20代でアメリカに移住し、アメリカで絵本作家として活躍。

21) *"Noah's ark"* c1977 (Y19-A844)

邦訳：『ノアのはこ船』（Y5-N02-69）

★1978年にThe Caldecott Medal（コルデコット賞）および1982年にThe National Book Award for Young People's Literature（全米図書賞）、1978年にThe Lewis Carroll Shelf Award（ルイス・キャロル・シェルフ賞）を受賞。

22) *"People"* c1980 (Y2-B428)

邦訳：『せかいのひとびと』（Y1-462）

★1981年にThe Christopher Award（クリストファー賞）を受賞。

◇Max Velthuis（国際アンデルセン賞画家賞 2004 受賞）

23) *"Het goedige monster en de rovers"* c1996 (Y17-A3065 ; Y17NL-V445-A3065)

邦訳：『ぬすまれたかいじゅうくん』（当館所蔵なし）

★1977年に金の絵筆賞を受賞

国際子ども図書館
第二資料室小展示
2009.5.21～7.14

- 24) “*Klein Mannetje vindt het geluk*” 2000 (Y17-B8326)

邦訳：『こびとくんのしあわせないちにち』(Y18-6284)

★1986年に金の絵筆賞を受賞

- 25) “*Kikker in de kou*” 1999, c1992 (Y17-A3347 ; Y17NL-V445-A3347)

邦訳：『げんきをだしてねかえるくん』(Y18-7600)

★1993年に金の絵筆賞および銀の石筆賞を受賞

◇Annie M. G. Schmidt (国際アンデルセン賞作家賞 1988 受賞)

- 26) “*Wiplala*” 1998, c1957 (Y8-A2929)

邦訳：『魔法をわすれたウィプララ』(Y7-145・[17])

★1958年に金の石筆賞を受賞

- 27) “*Minoes*” 1998, c1970 (Y8-A2930)

邦訳：『ネコのミヌース』(Y9-N06-H182)

- 28) “*Otje (オツチェ)*” 1998, c1980 (Y8-A2941)

★1981年に金の石筆賞を受賞

◇文字の本

- 29) Sylvia Vanden Heede ; The Tjong-Khing “*Het woordenboek van Vos en Haas (フォスとハースの辞書)*” c2002 (Y13-B14)

★2003年に金の絵筆賞を受賞。

- 30) Max Velthuis “*Het abc van Kikker (かえるくんのABC)*” 2005 (Y17-B8480)

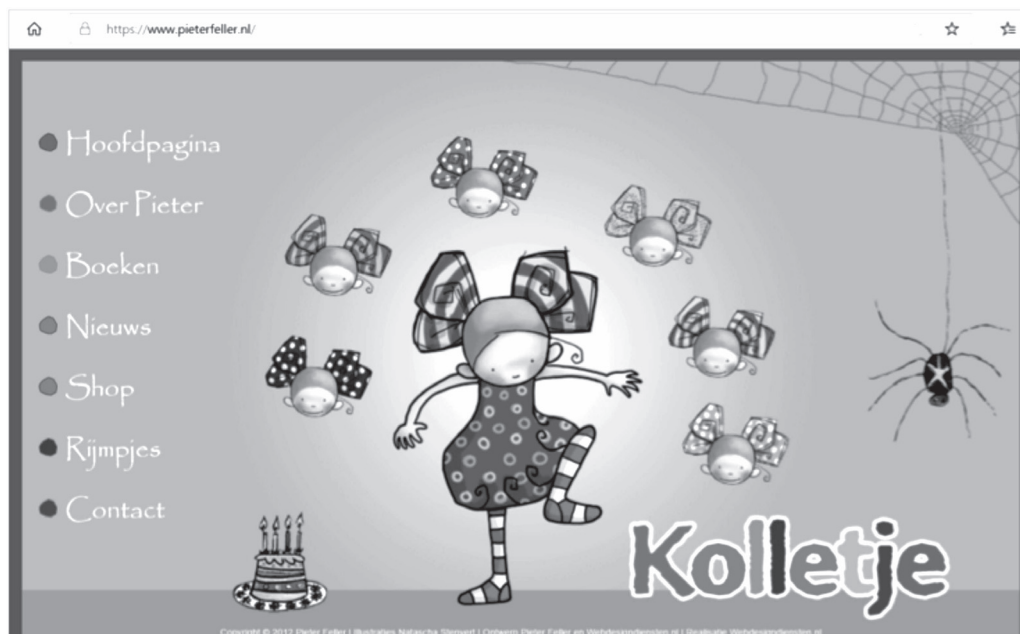
- 31) Marrienne Busser ; Ron Schroder ; van Ingrid ter Koele “*Het Letterwinkeltje (文字のお店)*” 2006 (Y17-B7885)

- 32) Piet Grobler “*Het vogeltjes ABC (鳥のABC)*” 2007 (Y17-B8451)

- 33) Gitte Spee “*Er was eens een aapje (猿がいました)*” c2007 (Y17-B10130)

金・銀の石筆賞 (Gouden Griffel/Zilveren Griffel) は、6～9歳を対象に書かれた優れた児童文学作品に与えられる賞で、1971年にオランダ図書宣伝協会 (Collective Propaganda van het Nederlandse Boek ; CPNB) により創設されました。また、金・銀の絵筆賞 (Gouden Penseel/Zilveren Penseel) は優れた挿絵作品に与えられる賞で、1973年に同協会により創設されました。

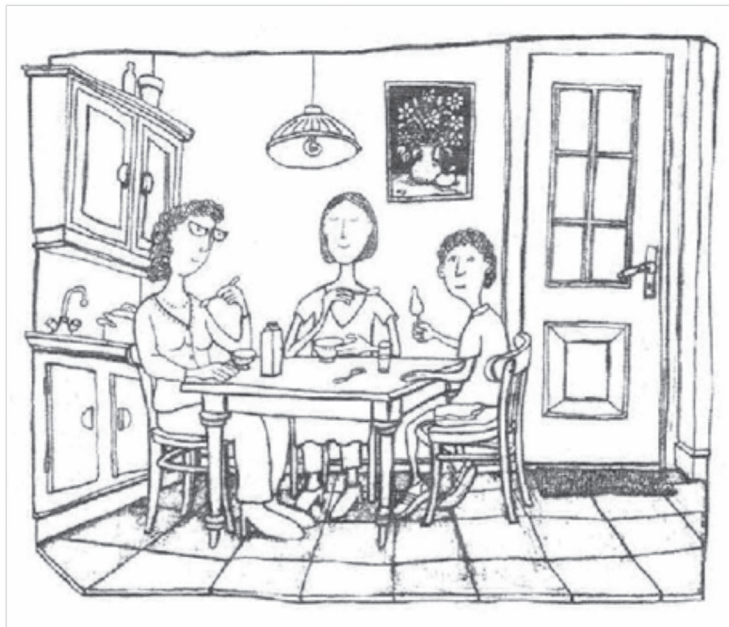
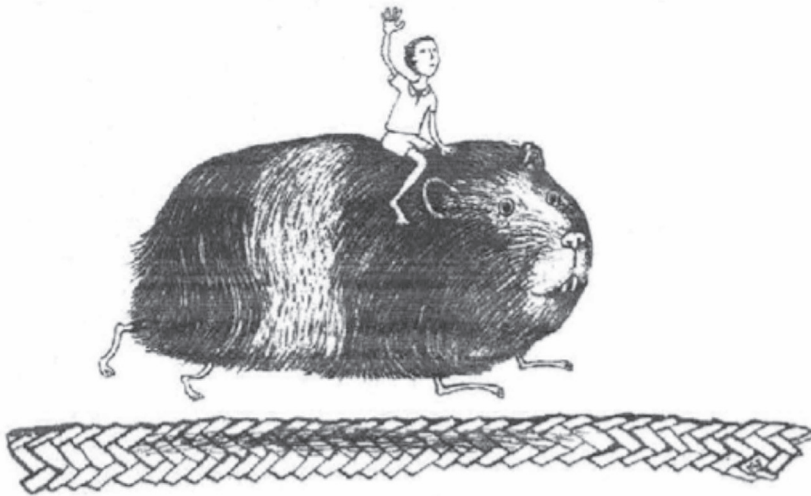
3. Pieter Feller の公式ウェブサイト



4. 表紙



5. 挿絵 (Niels de Hoog による) 上から p.5、 p.21、 p.34



-
- i <http://www.moj.go.jp/JINKEN/LGBT/index.html> 「多様な性について考えよう」法務省人権擁護局
- ii <https://tokyorainbowpride.com/lgbt/> 「LGBTとは、Lesbian (レズビアン、女性同性愛者)、Gay (ゲイ、男性同性愛者)、Bisexual (バイセクシュアル、両性愛者)、Transgender (トランスジェンダー、性別越境者)の頭文字をとった単語で、セクシュアル・マイノリティ(性的少数者)の総称のひとつです。」東京レインボープライド
- iii <http://pridehouse.jp/> プライドハウス東京
- iv 現地の言語(オランダ語)で Vlaanderen、フランス語で Flandre、英語で Flanders と表記する
- v 現地の言語(オランダ語)で Antwerpen、フランス語で Anvers、ドイツ語で Antwerpen、英語で Antwerp と表記する
- vi 当時と比べ現在でもオランダ語を正式に学習する日本人は少ない。オランダ語が使える日本人で本職の翻訳者の数は不明であるが、例えば、筆者の所属する、JAT 日本翻訳者協会(Japan Association of Translators)の公式ウェブサイトでおランダ語から日本語への翻訳者(日本在住)を検索すると、該当するのは2名のみである。 <https://jat.org/ja/translators>
- vii “Map : The Netherlands and Belgium showing provincial borders and main cities.” *Dutch. A linguistic history of Holland and Belgium* (2013) Bruce Donaldson
- viii <https://translate.weblio.jp/guide/%E7%94%A3%E6%A5%AD%E7%BF%BB%E8%A8%B3%E3%81%AE%E4%BB%95%E4%BA%8B>
産業翻訳の仕事「産業翻訳は、ビジネスの現場で必要とされる翻訳業務全体を指す語です。『ビジネス翻訳』や『実務翻訳』と呼ばれることもあります。
産業翻訳は、海外の取引先との意思疎通や情報交換、契約の締結などといった業務上のやりとり、および、技術文書やマニュアル、仕様書の翻訳といったドキュメント類などを主に翻訳します。」Weblio 辞書
- ix <https://translate.weblio.jp/guide/%E5%87%BA%E7%89%88%E7%BF%BB%E8%A8%B3%E3%81%A8%E3%81%AF>
出版翻訳とは「出版翻訳は、出版物を翻訳する作業です。主に外国の書籍を日本国内で出版する際の日本語訳を執筆することを指します。
出版翻訳の中にも、フィクションやノンフィクション、児童書、歴史小説などから、学術書、評論に至るまで、内容は多岐にわたります。」Weblio 辞書
- x アーツフランダース・ジャパン <http://www.flanders.jp/>
「アーツフランダース・ジャパンはベルギー・フランダースと日本の芸術文化交流の「かけはし」として創造的な出会いの場を提供しています。」
- xi 2019年12月までに4回のオランダ語修得者交流会、その他講演等々複数回のイベントが企画されている。
- xii 「日本における多様性の尊重や理解促進の一助となれるよう、オランダ王国大使館は「プライドハウス東京」の取り組みを後援しています。セクターを超えた団体・個人・企業が集まって作られた『プライドハウス東京コンソーシアム』によって企画・運営されている本プロジェクトは、『2020年東京オリンピック・パラリンピックを契機と捉えて、LGBTに関する様々なイベントの開催や情報発信をし、LGBTのアスリートや、その家族や友人そして観戦者や地元の参加者が自分らしく、多様性をテーマとした大会を楽しめるように活動するとともに、2020年のレガシーとして、次世代のLGBTの若者が安心して集える常設の居場所づくり』を趣旨としております。詳細は、プライドハウス東京のウェブサイトをご参照ください。」オランダ王国大使館広報・政治・文化部
- xiii “Dutch is an official language in the Netherlands, Belgium, Suriname and also in Aruba, Curaçao and Sint Maarten. About 24 million people speak Dutch as a mother tongue.” (オランダ語は、オランダ、ベルギー、スリナム、アルバ、キュラソー(クラサオ)、シント・マールテンの公式言語であり、約2千400万人がオランダ語を母語としている。) The Dutch Language Union. <http://taalunieversum.org/inhoud/general-information-english>
<http://taalunieversum.org/inhoud/general-information-english>
- xiv 「オランダ・ベルギー間の合意によりオランダ語連合(Dutch Language Union)が結成され、オランダ語に関する政策を連携して行っています。スリナムもその一員です。オランダ語連合はオランダ語のスペリングを標準化しました。これによりEUにおけるオランダ語の共通言語政策を確かなものにした。」オランダとわたし 王国について(駐日オランダ王国大使館) <https://www.orandatowatashi>

nl/about/orandago

- xv 「オランダ語 世界中にオランダ語話者は2300万人います。オランダ語はオランダ、ベルギー（フランドル地方）そしてスリナムで話されています。オランダ語はアルバ、クラサオ、シント・マールテンの公用語でもあります。」オランダとわたし 王国について（駐日オランダ王国大使館） <https://www.orandatowatashi.nl/about/orandago>
- xvi 「十六世紀中頃、今日のベルギー、オランダ、ルクセンブルクを合わせた地域にほぼ相当する『^{ネーデルラント}低地諸州（Nederlanden）』を支配下に置いていたのはハプスブルグ家であった。この地域は、フランスのヴァロア家の傍系であるブルゴーニュ家による支配の時代（1363～1477年）以降、徐々に一体化が進んでいた。そして1543年に低地諸州の統一をほぼ完成させたのが、今日のベルギーのヘント（ガン）市で生まれたハプスブルク家の神聖ローマ皇帝カール5世で、スペイン王としてはカルロス1世を名乗った。」オランダの歴史 p.3
- xvii 講演「オランダとベルギーの子どもの本は、いま」の記録では、ベルギー独立は1839年と記されているが、実際にベルギーでは独立宣言がなされた1830年独立とされ、祝われている。1839年はオランダがベルギーの独立を承認した年である。
- xviii 原文では spannend というこぼを使っている。「わくわくする」「興奮する」などの意
- xix 「特に欧米の作品には、親の家出、親の離婚や再婚、虐待する親、子どもが親の保護者になる家庭、単親家族、新しいタイプの母親、LGBTの家族など、従来型ステレオタイプを離れたさまざまな家族が登場している。」さくまゆみこ 「絵本や児童文学における新しい家族のかたち～英米のリアリズム作品にみる非血縁の家庭～」総合文化研究所
- xx 「（3月22日に）連続テロがあったばかりで、自粛すべきか、やるべきか、迷う声もいろいろありました。でも、今だからこそやるべきと判断しました。…ブリュッセルがこの20年、大切に培ってきた価値観そのものがテロで揺さぶられている。LGBTはもちろん、どんな少数派も、堂々と自分らしく生きられるブリュッセルを、今こそより強く世に問いかけなければ…今では、なくてはならない存在となった市民によるLGBTの祭展「プライド」（Pride）の記者会見で、力強く語ったのは総監督のアラン・デゥブラン氏だ。続いて、ブリュッセル市長、機会均等担当助役、市観光局イベント担当らが、次々と訴えた。「少数派に優しい社会づくり」がブリュッセル市政にどれほど重要なのか、LGBTコミュニティが、その推進にどれほど貢献してきたのかを――。ベルギーはこうして、オランダに次いで世界で2番目に同性結婚を合法化し、翌年の2004年には、カップルの片方がベルギー在住であれば、外国籍であっても、ベルギー内で合法的に結婚が成立するようになった。以来、人口1000万人のこの国で、年間1000組を上回る同性カップルが、合法的に家庭を築く。」 https://www.huffingtonpost.jp/2016/05/05/belgium-lgbt-pride_n_9853762.html
- xxi 「米リサーチ会社ギャラップが実施した「自分の住む国がLGBTにとって暮らしやすいか？」を聞いた国際世論調査結果でオランダが1位にランクインしました。83%の同性愛者が暮らしやすいという驚くべき結果が出ました。ランキングの上位は欧州各国が連なり、アフリカ各国が下位に並ぶといった結果で、日本は全123か国中50位でした。…2000年12月に同性結婚法が成立し、2001年4月1日に同法律が施行されました。これは世界で初めて異性同士の結婚と同じ婚姻制度を導入した例です。ただ厳密には同じといえず、財産や相続、社会保障などは異性同士の結婚と同等の権利を持ちますが、海外から養子を迎えることが不可能であったり、永住権を持たない外国人はオランダで結婚できないなどの規制もあります。世論調査を行ったところ、現在オランダの国民の85%～90%の国民が同性婚を支持している、毎年結婚数75000組のうち3000組が同性婚であるという結果がでました。同性婚の話の話からは逸れますが、オランダではカミングアウトする平均年齢は14歳と言われています。14歳といえば、思春期の時期なので、オランダの教育機関でのLGBTの教育やサポート体制が整っていることが伺われます。」 <https://nijipi.lgbt/life/3742> 世界一LGBTに優しい国、オランダ